

鑑賞サポートについて

～東京文化会館「リラックス・パフォーマンス」の例を中心に～

目次

3	発行にあたって
4	鑑賞をひらく、ということ
6	鑑賞サポート公演の企画から実施まで
8	鑑賞サポート 実施のプロセス
8	① 鑑賞サポートの検討
8	② 鑑賞サポート内容の決定
9	③ 鑑賞サポート導入の準備
9	④ 席の割り当てと券種の設定
10	⑤ 広報活動の計画と実施
12	⑥ 鑑賞に伴う関連情報等の公開
13	⑦ 来場者対応
14	⑧ 振り返り
15	鑑賞サポートプログラムと アクセシビリティ対応を一体的に
19	貸館における鑑賞サポート 2024年度 クリエイティブ・ウェルビーイング・トーキョー パートナープログラム 「劇場体験を拡張させる鑑賞サポートのデザイン」検証報告
20	東京文化会館 職員による座談会 「鑑賞サポート」に向き合って見えてきたもの - 事業を振り返って

発行にあたって

障害の有無、言語・文化の違いを超えて、多様な人々が文化事業に参加し、ともに創造していくための環境整備や調査・検証・開発に取り組む「クリエイティブ・ウェルビーイング・トーキョー」は、東京都と公益財団法人東京都歴史文化財団 アーツカウンシル東京の共催で実施しているプロジェクトです。芸術文化を通じた共生社会の実現を目指し、東京都の2030年に向けた文化政策（「東京文化戦略2030」）に基づき展開しています。

同プロジェクトの一環として、2023年度に始動したのが、「パートナープログラム」です。

文化施設、NPO、研究機関や文化事業に関わる多様な担い手と連携し、文化施設や文化事業のアクセシビリティ向上に関わるさまざまなテーマのもと事業モデル開発に取り組んでいます。

そのうちのひとつとして、東京文化会館が企画運営を担い実施したのが、「劇場体験を拡張させる鑑賞サポートのデザイン」（2023-2025）です。障害の有無や文化の違いにかかわらず、多様な方にホール・劇場での鑑賞体験を楽しんでいただくための環境づくりや、これからの鑑賞サポートのあり方について検証と試行を3年にわたり重ねました。

1年目は、多様な方がホール・劇場を楽しむための環境づくりを担う人材として「アクセスコーディネーター」に着目し、神奈川芸術文化財団・彩の国さいたま芸術劇場・東京文化会館の事例共有を通して、今後ホール・劇場などで求められる人材像についての洗い出しを試みました。2年目は、東京文化会館が、同館を定期的に利用する4つの団体の鑑賞サポートの初実施に伴走することを通して、貸館事業等における鑑賞サポートの普及について検証しました。4団体へのヒアリングや、鑑賞サポート利用者へのアンケートを実施し、鑑賞サポートを提供する側の課題や、利用者のニーズについて確認しました。3年目は、それまでの取り組みを踏まえ、鑑賞サポートをはじめようとしている団体等へどのような情報提供ができるかという視点をもとに、鑑賞サポートを考える上で手がかりとなるような情報をまとめた本書を制作しました。

本書では、東京文化会館の恒常的なアクセシビリティ整備の取り組みと連動させながら、鑑賞サポートの現在地の確認とこれからの展望についてまとめています。

鑑賞をひらく、ということ

東京文化会館は、1961年の開館以来、オペラやバレエ、クラシックコンサート等、世界の名だたるアーティストによる公演が行われ、「音楽の殿堂」として親しまれてきました。

そしていま、「あらゆる人が音楽や芸術で交流し、心豊かに暮らせる社会」を目指し、社会包摂につながる活動に取り組んでいます。年齢や障害、立場や背景の違いを越えて、人々が分け隔てなく鑑賞体験を楽しんだり、創造の喜びを分かち合うことができる。そんな環境を整備し、機会を提供できればと考えています。

東京文化会館のアクセシビリティ向上と鑑賞サポート

近年、力を入れてきたのが、館のアクセシビリティ向上の取り組みです。その一環として、コンサートやワークショップにおいて、鑑賞サポート付き公演の経験を積み重ねてきました。そうした取り組みに加え、アートによる共生社会の実現を目指し、多様な人々が、分け隔てなく音楽やワークショップ等の舞台芸術をともに楽しめることを目的にした「コンビビアル・プロジェクト」を展開し、「リラックス・パフォーマンス」等を実施しています。2025年度は、きこえない・きこえにくい方たちのスポーツの国際大会「東京2025デフリンピック」開催を背景に、きこえない・きこえにくい子どもたちを中心に一般公募による出演者がワークショップを重ねた「舞響詩『田園』～踊る、鳴らす、詩う～」を実施しました。コンサートやワークショップ以外には、ろうナビゲーターが全編日本手話で舞台裏を案内する「手話でバックステージツアー！」を開催するなど、さまざまな企画の実施を通して、だれもがホール・劇場を楽しめる環境づくりに取り組んでいます。

3つの側面から「劇場体験」を拡張していく

2016年4月に施行された「障害者差別解消法」（2024年改正）により、障害のある人に対し合理的配慮の提供が求められるようになりました。また、2018年に施行された障害者文化芸術活動

推進法によって、ホール・劇場におけるアクセシビリティ整備が進んでいます。

だれもが楽しめる文化施設・文化事業を展開することが、共生社会の実現につながる――。

東京都歴史文化財団がすすめる芸術文化へのアクセシビリティ向上の3つの側面において、東京文化会館でも取り組みを行っています。

1つ目は文化施設に来場し、鑑賞・参加にいたるまでの障壁をできるだけなくし、安心して来場いただけるよう情報を伝えること、2つ目は公演の鑑賞やイベント・プログラムの参加体験を豊かにする鑑賞サポートを行うこと、3つ目はワークショップや作品づくりへの参画をサポートすることです。この考えをもとに、ホール・劇場をあらゆる人にひらかれたものとする取り組みを展開しています。

推進体制「社会共生プロジェクトチーム」の存在

2024年4月には、東京都歴史文化財団が運営する都立の文化施設に、社会共生担当という専任の職員が配置されました。東京文化会館では、社会共生担当をリーダーとして、「社会共生プロジェクトチーム」が発足。館内のすべての部署からそれぞれ数名ずつ選出された約10名のメンバーで構成されています。

現在は、このプロジェクトチームを中心に、館のアクセシビリティ向上に取り組んでいます。年に数回、社会共生に関するスタッフ研修も企画・実施しており、これまでに、ろう者が講師を務める手話研修や、やさしい日本語の研修、障害当事者等を交えた避難誘導の研修等を行いました。

本書では、回を重ねている「リラックス・パフォーマンス」の事例を中心に、これまで東京文化会館が実施してきた鑑賞サポートの取り組みを紹介するとともに、鑑賞サポート事業の普及に向け参考となるよう、実施のプロセスや課題等についてまとめています。

ひとりひとりの違いを前提に、「みる」「きく」「かんじる」場をひらいていくために何ができるのか。ここで紹介しているものがすべて正解・完成形というわけではありません。東京文化会館は、今後も当事者のみなさんとともに考え、アップデートを続けながら、鑑賞サポート事業に取り組んでいきます。



「東京文化会館 リラックス・パフォーマンス」



「舞響詩『田園』～踊る、鳴らす、詩う～」



「東京文化会館 手話でバックステージツアー！」

鑑賞サポート公演の企画から実施まで

2025年度の「東京文化会館リラックス・パフォーマンス～世代、障害をこえて楽しめるコンサート」を例に、公演の企画から実施、振り返りまでのプロセスをまとめました。一連の業務は、制作担当・広報担当・社会共生担当が連携しながら実施していきます。各プロセスの詳細は、p.8から順にご紹介していきます。



東京文化会館 リラックス・パフォーマンス
会場：東京文化会館 大ホール
日時：2025年6月7日（土）14:00～15:00
チケット発売日：2025年2月8日（土）

リラックス・パフォーマンスとは
障害・世代等をこえてあらゆる人が安心して音楽を楽しめる公演。「リラックス」は、“寛容な”という意味。自閉症やコミュニケーション障害、発達障害等により劇場や音楽ホールでの音楽鑑賞に不安がある人も、家族・友人・介助者とともに安心して鑑賞することができます。4歳以上の方ならどなたでもお楽しみいただけます。

1 鑑賞サポートの検討

公演の企画意図に合わせ、想定される来場者のニーズを確認し、どのような鑑賞サポートを用意するか、予算等も考慮しながら検討します。

2 鑑賞サポート内容の決定

鑑賞サポート内容がチケット販売に影響するため、制作の早い段階からサポートの内容を決定します。

3 鑑賞サポート導入の準備

業者への依頼・打ち合わせや、ナビゲーターの進行台本の制作、当日運営のスタッフ体制の構築など、鑑賞サポートを導入するための準備をしていきます。

4 席の割り当てと券種の設定

鑑賞サポート内容に合わせて、配席をします。どのような形でチケットを発売するかも検討し、設定します。

5 広報活動の計画と実施

チラシの作成と配布、館発行のメールマガジンでの発信、動画制作を含むSNSへの告知などを進めます。

6 鑑賞に伴う関連情報等の公開

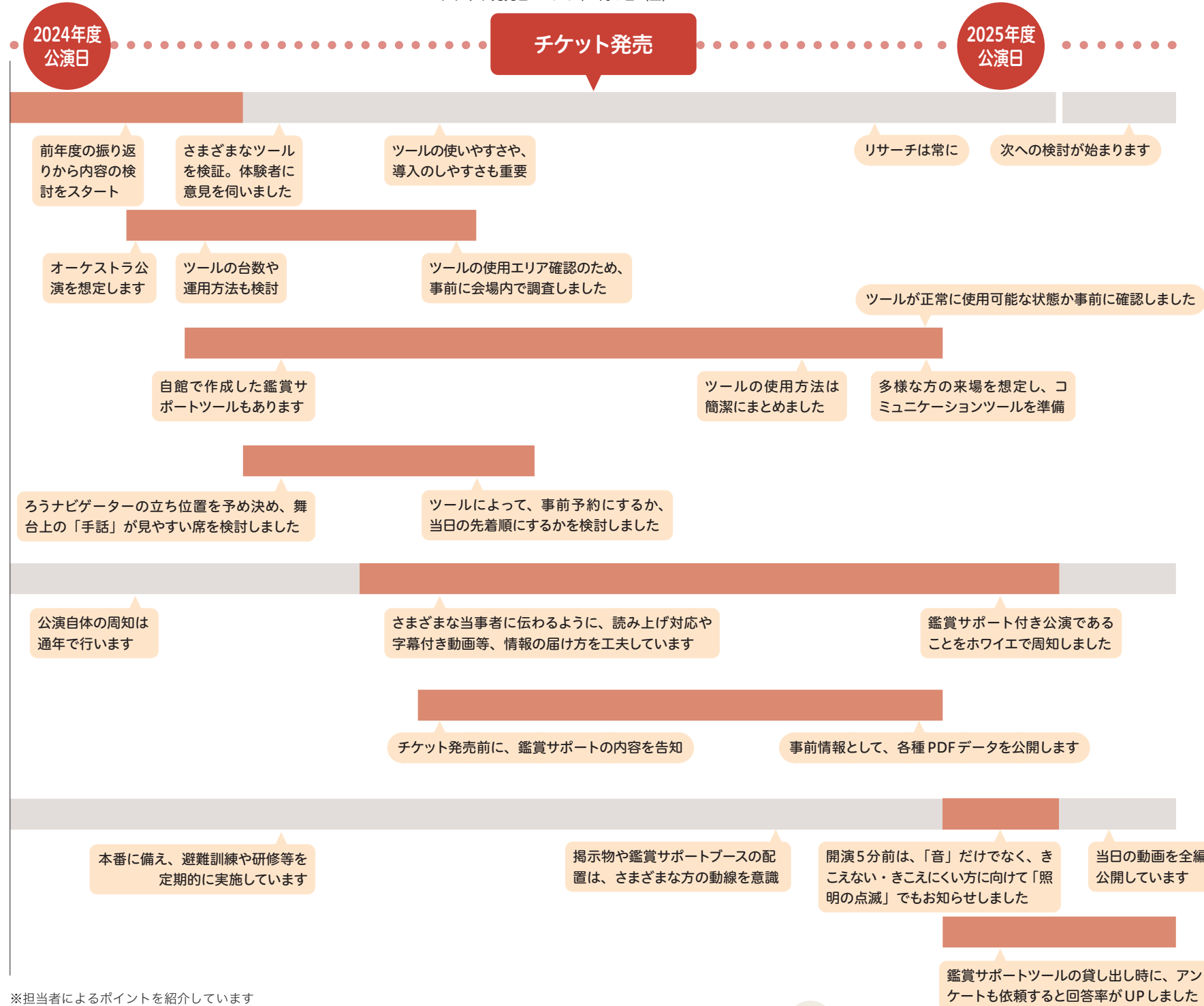
「当日配布するプログラムのPDFデータ」、「読み上げ対応付きプログラム」、「ご家族・介助者向けのご来場ガイド」をウェブサイトで事前に公開します。

7 来場者対応

スムーズに案内できるよう、スタッフを確保し、適切に配置します。災害等の緊急事態発生時の対応は日頃から訓練を重ねています。

8 振り返り

来場者から、公演後に直接聞き取りをしたり、アンケートを取って、次の事業にいかします。



※担当者によるポイントを紹介しています
※スケジュールは目安です

鑑賞サポート 実施のプロセス

① 鑑賞サポートの検討

2025年度のリラックス・パフォーマンスは、大ホールでのオーケストラ公演に決定しました。企画の内容に沿って、来場者を想定します。視覚・聴覚支援ツールの最新動向や、さまざまな当事者の方のニーズをリサーチするなど、日ごろからアンテナを張り、どのような鑑賞サポートが適しているかを考えます。その際、貸し出しがスムーズにできるか、だれにとっても使いやすいか、難しい操作はないかということも重要なチェック項目となります。

② 鑑賞サポート内容の決定

あらゆる人が同じ空間で音楽を楽しめるように、実施する鑑賞サポート内容は以下の通り決定しました。

●聴覚支援ツール

きこえない・きこえにくい方に向けて、「ヒアリンググループ」と「字幕タブレット」のほか、当事者の方から要望の多い「音を振動に変換する機器」も導入しました。

●視覚支援ツール

みえない・みえにくい方に向けて、「曲目リスト（点字版/拡大文字版/白黒反転版）」と「レーザ網膜投影視覚支援機器」を導入しました。リラックス・パフォーマンスを始めた当初、曲目リストは点字版のみ提供していましたが、点字ユーザーではない方も多いため、拡大文字版や白黒反転版も準備するようになりました。

●車椅子席・車椅子移乗席

車椅子席が限られているため、車椅子席に加え、移乗できる方を対象に移乗席を用意しました。車椅子の形状がさまざまであるため、事前にサイズや車椅子のタイプ等をお聞きして対応することにしました。

●フリーエリア

一時的に席を移動したい場合にお座りいただけるフリーエリアを客席内に設けました。上演中に休憩が必要になった場合は、客席の外に出て休憩し、途中で席に戻ることもでき、自席に戻りづらい場合にはフリーエリアも使えます。

●カームダウンスペース

会場のホワイエに、カームダウンスペースを用意しました。カームダウンスペースがあることで、安心して来館できるきっかけになればと考えます。



③ 鑑賞サポート導入の準備

ヒアリンググループや字幕タブレット等、専門業者への委託が必要な場合は、事前に打ち合わせを行い、操作性等の確認を行います。また、拡大文字・白黒反転版の曲目リストといった職員で作成する配布物を用意したり、手話通訳者等の手配、それに伴う事務手続きなど、鑑賞サポート導入の準備を進めていきます。

④ 席の割り当てと券種の設定

東京文化会館では、現在、ホールにヒアリンググループは常設していません。ヒアリンググループを実施する場合、エリアを決め、その都度、設置しています。また、フリーエリアは販売しない席として、売り止めをします。鑑賞サポートとして貸し出す視覚支援ツールや聴覚支援ツールの使用可能範囲によって、販売エリアを決定していきます。

鑑賞サポート機器の貸し出しについては、事前予約、当日の先着順、あるいは、あらかじめ「鑑賞サポートツール付き」チケットとして販売する等、さまざまな方法が考えられます。東京文化会館では、公演の規模や内容、機器の数と照らし合わせて都度決定しており、試行錯誤を続けています。

進行台本も当事者の方とともにブラッシュアップ

リラックス・パフォーマンスには、東京文化会館ワークショップ・リーダーによる「ナビゲーター」と、ろう者による「ろうナビゲーター」が出演しています。演奏の合間に曲のポイントを解説したり、曲に合わせて、会場のお客様と一緒に身体を使った参加型のワークをしながら、音楽の楽しさを伝えています。また、ナビゲーターは、進行台本の作成も担っています。お客様が舞台上のイメージを描きやすいよう、状況を詳しく説明することを心がけており、たとえば、「大きな舞台」ではなく、「幅が18メートル、奥行きが24メートルの大きな舞台」というように具体的に示します。ろうナビゲーターがきこえない・きこえにくいという観点から表現に不自然なところはないか確認するだけでなく、みえない・みえにくい方にも台本の確認を依頼。当事者の方の声を反映させながら、公演直前までブラッシュアップしていきます。

⑤ 広報活動の計画と実施

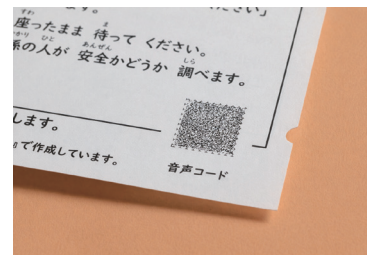
必要な情報が必要な人に届くよう、できるだけ早い段階から広報活動をスタートさせますが、たとえば、特別支援学校等にチラシを配布するときには新年度以降にするなど、タイミングを見極め、臨機応変に動くことも必要です。

●チラシ制作における工夫

チラシのイラストは、障害のある方々が通うアトリエに依頼し、公演のテーマに合わせて作成してもらっています。また、わかりやすい表現、ユニバーサルデザインに準じた色や書体を使い制作しています。

印刷物には、テキストの表示と音声の読み上げに対応する音声コードを入れます（写真）。

専用のスマートフォンアプリや読取装置で情報の読み取りが可能です。音声コードを入れる場合は、読み上げ原稿を作成すること、音声コードの有無と位置を特定する「切り欠き」加工が必要です。



音声コードと切り欠き加工の例（写真は災害時の案内チラシ）

●ウェブサイトにおける工夫

公演ページには、鑑賞に伴う関連情報を事前に公開したり（p.12⑥を参照）、公演の様子を伝える一つとして過去の公演の記録映像を掲載しています。館のアクセシビリティ情報をまとめたページも作成しました。また、さまざまな当事者の方によるウェブアクセシビリティ診断や、※日本産業規格JIS X 8341-3:2016を参照しながら、ウェブアクセシビリティ向上に取り組んでいます。

※「高齢者・障害者等配慮設計指針—情報通信における機器、ソフトウェア及びサービス—第3部：ウェブコンテンツ」のレベル「AA」（13項目）、もしくはレベル「AAA」（23項目）に準拠することを目標としています。

●SNSの発信に注力

通常のメールマガジンのほか、「コンビビアル通信」という社会共生にテーマを絞った月1回発行のメールマガジンや、SNS等でさまざまな方に情報が届くような発信に力を入れました。

特に、きこえない・きこえにくい方に有効な手段が、InstagramやYouTubeの動画です。2025年の公演では過去公演の収録映像を使用して広告動画を作成し、Instagramで配信しました。

情報を伝える際に留意しているのは、内容を盛り込みすぎないということです。簡潔に、わかりやすく、公演に関心をもってもらえるような表現を心がけました。

●広報先の検討

さまざまな当事者の方へのヒアリングを重ね、広報のアプローチ方法を考えています。当事者の方々が利用するサイト、掲示板等へ書き込みをしたり、メーリングリストに載せてもらえるよう依頼しています。

また、都内すべての特別支援学校（病院内の分教室含む）、社会福祉団体等にチラシを配布しています。

鑑賞サポートを利用した さまざまな当事者の方の声も参考に

Q どのところから情報を得ていますか

- ・手話付きの動画をよく見る。Instagramを情報源にしていることが多い（きこえにくい方）
- ・当事者団体が発信しているメーリングリストを参考に。テレビやラジオから情報を耳にする（みえない方）

Q どのような配慮があるとよいですか

- ・館のウェブサイトやYouTubeなど動画のリンクがあるとよい（きこえにくい方）
- ・ウェブサイトでは、テキストファイルは読めるが、JPEGやPDFのデータは読めないのが、うまく情報を取ることができない場合がある。また、情報を得たとしても、そこから自力でチケットを購入するのが難しい。不正アクセスを防ぐ認証システム（特定の画像を選ばせるものなど）があるとお手上げなので、考慮してほしい（みえない方）

2024年度「クリエイティブ・ウェルビーイング・トーキョー パートナープログラム『劇場体験を拡張させる鑑賞サポートのデザイン』」で実施したヒアリングより

⑥鑑賞に伴う関連情報等の公開

公演の約2～3週間前に、「当日配布するプログラムのPDFデータ」、「読み上げ対応プログラム原稿」と、「ご家族・介助者のためのご来場ガイド」をウェブサイトに公開します。

どの情報も、わかりやすい表現を心がけています。

●当日配布するプログラムのPDFデータ

当日、会場で来場者に配布する「プログラム」(印刷物)のPDFデータを、事前にウェブサイトで公開します。公演前に詳しい内容を把握できます。パソコンやタブレットで拡大して読むこともできるため、みえにくい方への情報保障ともなります。

●読み上げ対応プログラム原稿

みえない・みえにくい方が利用する、読み上げに対応した文字によるプログラムです。当日配布プログラムから、コンサート中の過ごし方、曲目解説、出演者プロフィール等を抜粋して掲載しています。読み上げソフトやデバイスにはさまざまな種類があるため、対応しきれていない場合もありますが、当館において可能な限り確認をし、間違いなく読み上げられるよう、改行の位置などに注意して作成しています。

●ご家族・介助者のためのご来場ガイド

ホールでの音楽鑑賞に不安のある方が、安心して音楽を楽しめるよう、環境づくりの一つの助けとして作成しています。会場までのアクセス、ホールの雰囲気や当日の流れ、チケットの見方などを説明しています。



当日配布するプログラム
(画像は曲目解説のページ)



ご家族・介助者のためのご来場ガイド
(画像は表紙)

⑦来場者対応

数多くの業務が立て込む公演当日。鑑賞サポート付き公演における来場者の受け入れ準備には、鑑賞サポートブースの設営や、支援が必要な来場者への個別対応等の人員も要します。

人員配置と会場レイアウトの調整

受付と客席内に手話通訳者を配置するほか、指差しコミュニケーションシート、会話をリアルタイムで文字化・視覚化するアプリを表示したタブレット、筆談ボードを用意し、手話以外のコミュニケーションでも対応できるようにします。

会場のホワイエに設置する受付や鑑賞サポートブース、カームダウンスペース等は、さまざまな方の移動や利用のしやすさを考慮し、レイアウトを調整しました。

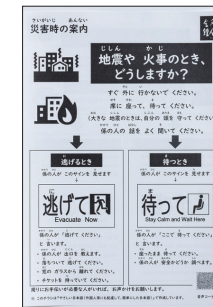
各所に職員を配置し、社会共生担当職員が全体の統括を行いました。不測の事態に備えて、余裕をもった人員配置をするようにしています。

緊急時の対応 災害時に使用するサインを独自に制作

災害時、何が困難となるのか。これを検討した上で、情報伝達や避難誘導體制を構築しています。

緊急時の情報発信は、場内アナウンスなど音に頼りがちですが、きこえない・きこえにくい方向けに、音以外のツールも必要と考えます。広い会場で大人数を誘導することを考慮し、社会共生プロジェクトチームで制作したのが、災害時の「避難誘導旗」です。すぐに取り出せるよう布製の畳める形状のもので、レセプションист全員が携帯しています。試作を重ねて、見やすい色や字体を工夫しました。

さらに、「やさしい日本語」による「災害時の案内」チラシをつくり、すべての主催公演で配布しています。チラシには、地震や火事とき、避難するために必要な情報を記載しました。みえない・みえにくい方に向けて、音声コードも入れています。



⑧ 振り返り

東京文化会館では、事業ごとにアンケートを実施し、現場にフィードバックしていますが、鑑賞サポート付き公演も例外ではありません。利用者の声を記録しておくことは、サポートの質を高める手がかりになります。

これまでのリラックス・パフォーマンスでは、アンケートに加え、公演終了後に直接、さまざまな当事者の方のヒアリングを続けてきました。

また、貸し出した鑑賞サポートツール返却の際に意見をいただくこともあります。機器の使用感や公演の感想、鑑賞サポート全般に関する希望等、熱心に伝えてくださる方も多くいらっしゃいます。

さまざまな当事者の方の意見を取り入れ、改善する。これを繰り返すことで、だれもがいつでも楽しめる音楽ホールになることを目指しています。

来場者の声

◆点字の曲目リストの利用者より

今回は点字の曲目リストを受付でもらって、これを見ながら鑑賞した。大変良かった。どんな曲があるのか、待っている数分の間に確認できると、自分はクラシックも好きなので、曲目でいろいろイメージができて、始まる前からワクワクして楽しめた。点字の曲目リストはすごく嬉しい。点字しかないと思っていたが、実は拡大文字版もあったのを受付で初めて知った。「拡大文字版と点字版と両方ありますがどちらがよろしいですか」と聞いてくださったことはすごく嬉しかった。

◆音を振動に変換する機器の利用者より

- ・音に反応して、振動して、音がわかりやすかったです。
- ・少しの音でも振動して伝わり、すばらしかった。
- ・強弱のめりはりがわかって良い。
- ・きこえない息子にとって音楽にふれられた時間でした。

◆字幕タブレットの利用者より

- ・字幕は、内容が確実に出ていて見やすかった。
- ・字幕もあるし、手話もあるし、見たい情報を選べるのがいい。

◆事前の情報提供について

- ・今日のコンサートのことと、演奏される曲目があって、事前に知ることができたのはすごく嬉しい。

2024～2025年度「リラックス・パフォーマンス」で実施したアンケート、ヒアリングより

鑑賞サポートプログラムと アクセシビリティ対応を一体的に

公演時の鑑賞サポートプログラムと、施設における恒常的なアクセシビリティ対応。客席やホワイエ、総合案内にいたるまで、この2つを一体的に提供することで、あらゆる人にとっての鑑賞体験がより豊かなものになることを目指しています。鑑賞サポートプログラムに関しては、リラックス・パフォーマンスで導入したものをご紹介します。

鑑賞サポートプログラム

客席内、ホワイエ

●手話（舞台上）

リラックス・パフォーマンスでは、各曲の解説をしたり、簡単なワークを挟みながら進行する「ナビゲーター」がいます。きこえない・きこえにくい方に向けて、ともに手話で公演をナビゲートする役割を「ろうナビゲーター」が担います。

《聴覚支援の対応》

●手話（受付）

会場の受付に、手話通訳者がいます。

●ヒアリングループ

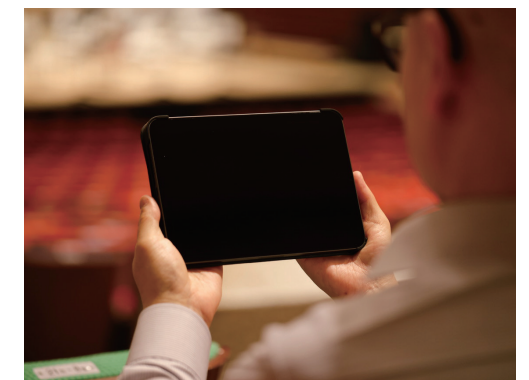
補聴器や人工内耳に内蔵されているTコイル（磁気誘導コイル）を使って、会場の音声をクリアに聞くことができる設備です。音声信号を送ると床などに敷置されたループアンテナから、誘導磁界が発生し、Tコイル（磁気誘導コイル）が同期することで、補聴器や人工内耳に直接、音が届きます。ループの音は、補聴器や人工内耳のTモード、または専用受信機で聞くことができます。

東京文化会館では、Tモードに対応していない補聴器を使用されている方や、補聴器をお持ちでない方に対しては、専用受信器を貸し出しています。

●字幕タブレット

小型タブレット端末に、ナビゲーターのトーク内容や曲目、場内アナウンスを文字で表示します。本公演では、遮光処理を施した専用タブレットを貸し出しました。利用者ご自身のスマートフォンにアプリをインストールしてご利用いただく運用方法もあります。

導入にあたっては、表示させる字幕の原稿作成や、機材の設置等のほか、本番で字幕を出すタイミングを図り、画面切り替えの操作をする人員等も必要となります。



●音を振動に変換する機器

さまざまなタイプの機器が登場していますが、手持ち型で、音が振動になって手に伝わる機器を貸し出しました。音を振動として感じることで、音楽の鑑賞をサポートします。

●文字表示支援システム

音声認識技術を使い、会話やスピーチがリアルタイムで文字に変換されるアプリを活用しています。アプリを表示させるタブレットを、会場の受付や鑑賞サポートブースに準備し、常に会話の文字が表示される状態にしています。クラウドを利用したアプリケーションで、スマートフォン、タブレットやPC等さまざまなデバイスに対応しているものを利用しています。

●指差しコミュニケーションシート

伝えたいことの「イラスト」や「文字」を指差し、簡単なコミュニケーションを取ることができるツールを作成しています。文字は、日本語版と英語版があります。



●筆談ボード

筆談での対応ができるように、筆談ボードを準備しています。筆談を行う際には、文章を短く書くことを心がけています。



《視覚支援の対応》

●レーザ網膜投影視覚支援機器

視覚を支援する手持ち型の機器を貸し出しました。最大7倍のズーム、明るさの調整、グレースケール表示、白黒反転等が可能です。

●曲目リスト (①点字 ②拡大文字 ③白黒反転)

同じ内容のものを3つのパターンで作成しています。点字ユーザー以外のみえにくい方も想定し、選択肢を設けています。点字は外部に依頼し、拡大文字(白地に黒色の文字)、白黒反転(黒地に白色の文字)は自館で作成。当日、希望者に配布しました。

●音声ガイド

リラックス・パフォーマンスで導入はしていませんが、鑑賞サポートツールの一つとして、音声ガイドがあります。貸館における鑑賞サポートプログラムのうち、オペラ公演で提供しました(p.19参照)。

これは、専用の機器やスマートフォンを用いて、音声による情報を提供するツールです。みえない・みえにくい方でも作品を楽しめるよう、舞台の風景や状況、登場人物の衣装や表情など視覚情報を音声で補います。解説者が舞台進行と同時にリアルタイムでナレーションをする方式と、事前収録しタイミングを見ながら切り替える方式があります。導入にあたっての留意点は、内容をどこまで盛り込むか、どのように表現するかなど、工夫が必要となることが挙げられます。

《センサーフレンドリーな対応》

●カームダウンスペース

場内で不安やパニックになってしまった方に向け、気持ちを落ち着かせる空間として、光や音を抑え、刺激から一時的に距離を取れる場所を、会場のホワイエに設けました。

●センサーツール

耳を覆って音を遮断するイヤーマフを用意しました。オイルタイマー等の眺めて落ち着

くもの、スクイーズボール等の触って落ち着くといわれているものもあります。



施設のアクセシビリティ対応

総合案内

●手話

全国手話検定5級レベル(手話で簡単な自己紹介ができる程度)以上のスタッフがいます。

●透明ディスプレイ

音声をリアルタイムに文字へ変換し、透明なディスプレイに音声字幕・翻訳(多言語)を映すことができ、スタッフとコミュニケーションがとれる機器を設置しています。



●デジタルワイヤレス補聴援助システム

送信機と受信機をワイヤレスで連携させ、音声を届ける補聴援助システムを用意しています。

●文字表示支援システム

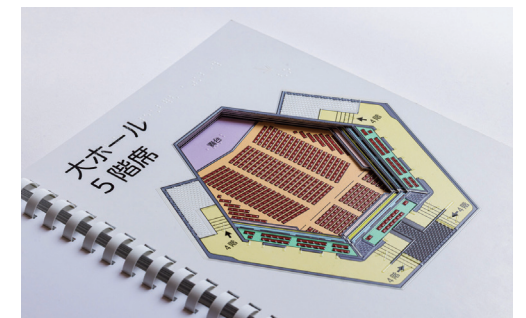
●指差しコミュニケーションシート

●筆談ボード

公演時、鑑賞サポートとして会場の受付にも準備しますが、館のアクセシビリティとして総合案内に常備しています。良いコミュニケーションのための取り組みの一つです。

●点字・触知図ガイドブック

みえない・みえにくい方、みえる方も一緒に確認できるように、点字と墨字で東京文化会館について紹介している冊子です。大ホールや小ホールの触知図もあります。触知図は表面に凹凸があり、触って空間を認識することができる図です。



ホワイエ

●大ホール・小ホール触察模型

ホールの形状を触って体感できる立体の模型です。大ホール（写真上）は実物の約70分の1、小ホール（写真下）は約45分の1スケールで作成しました。各ホールでの公演時に、どなたでも自由に触ることができます。



ウェブサイト・パンフレット等

●ウェブサイト

「東京文化会館アクセシビリティ情報」

ウェブサイトに、東京文化会館のアクセシビリティに関する情報をまとめたページを作成しています。同じ内容で、「日本語」と「やさしい日本語」のページがあります。



●動画による施設紹介

施設の概要や魅力を、ろうナビゲーターが日本手話で案内する動画を公開しています。日本語字幕と音声ガイドを入れています。



●アクセシビリティチラシ

東京文化会館のアクセシビリティ向上の取り組みについて紹介するチラシを作成しています。音声読み上げに対応する音声コードを入れています。



●やさしい日本語版 東京文化会館パンフレット

施設（建物や場所）について、「やさしい日本語」と「英語」で紹介しています。音声コードを入れています。



貸館における鑑賞サポート

2024年度 クリエイティブ・ウェルビーイング・トーキョー パートナープログラム 「劇場体験を拡張させる鑑賞サポートのデザイン」検証報告

鑑賞サポートプログラムを 試験的に実施・検証

ホール・劇場における鑑賞サポートの普及を視野に、東京文化会館を定期的に利用する貸館団体4団体3法人と連携し、バレエとオペラ公演において鑑賞サポートプログラムを試験的に実施しました。目的は、貸館団体（公演主催者）と鑑賞サポートを利用する鑑賞者のニーズをつかみ、鑑賞サポート付き公演の企画・運営・広報における必要事項を可視化させること。双方にヒアリング調査を実施して、鑑賞サポートのあり方を検証するというものでした。実施にあたり、東京文化会館側は、①実施のための調整、②内容の相談対応、③機器や業者等の有益な情報の提供や広報協力、④現場での運営補助を行いました。

成果と課題 2025年度につながる手応え

鑑賞サポートの導入について必要性を感じていたものの、実施経験がない4団体との連携による試験導入でしたが、実施後には、「鑑賞サポートブースを設置することによって、一般の来場者にも取り組みを知ってもらった」「マスコミやSNSでの反響があった」「今後も鑑賞サポートに取り組みたい」といった声が寄せられました。

課題としては、鑑賞サポートツールの提供やホワイエでの対応等、表方スタッフの増員が必須であること、当事者の方に届く効果的な広報ができなかったこと、団体内での意識の共有がまだできていないことなどがあげられました。実際にチケットを購入し、利用する方は少ないのではないかという懸念も聞かれました。しかし、初めてバレエやオペラに

ふれたという鑑賞者からは、実際に体験して感動したという感想が数多く寄せられ、これまでに体験する機会がなかった、あるいは少なかつただけであり、続けていくことで足を運ぶ方が増えていくのではないかと希望が見えています。

2025年度に継続して鑑賞サポートを導入した団体があったり、これら団体の公演に触発され、新たに挑戦したいという団体からの問い合わせがあったりと、徐々に波及している状況があります。

ヒアリングした鑑賞者の声

◆レーザー網膜投影視覚支援機器の利用者より

- ・動きや舞台全体を観ることができ、初めてバレエというものの楽しさを知ることができて嬉しい。（バレエ公演・みえにくい方）
- ・終演後、シーンやストーリーについて、「こんなところがよかったね」と一緒に公演の話ができたことが本当に嬉しかった。（バレエ公演・みえにくい方に同伴されたみえるご家族の方）

◆音声ガイドの利用者より

- ・みえなくても十分楽しむことができた。（オペラ公演・みえない方）

◆ヒアリンググループの利用者より

- ・臨場感があり、映像で観るよりも、音楽やお芝居がすごく近くに感じられて嬉しかった。（オペラ公演・きこえにくい方）

東京文化会館 職員による座談会 「鑑賞サポート」に向き合って 見えてきたもの 一事業を振り返って

2020年から始めた「リラックス・パフォーマンス」は今年で6年、東京文化会館で実施してきた鑑賞サポート付き公演は、ワークショップを含めて50本を超えました。

「リラックス・パフォーマンス」だけでなく、ミュージック・ワークショップ「不思議なミュージアム」、きこえない・きこえにくい方等の当事者参画型の作品「舞響詩『田園』～踊る、鳴らす、詩う～」の担当者も集まり、これまで手がけてきた「鑑賞サポート」について思うこと、見えてきたものや今後について語り合いました。

出席者	事業企画課長 梶 奈生子	事業係主事 榮 咲季 (「不思議なミュージアム」 「舞響詩『田園』～踊る、鳴らす、詩う～」担当)
	営業推進担当課長 大橋 昭則	阪本 涼音 (「舞響詩『田園』～踊る、鳴らす、詩う～」担当)
	事業係長 中村よしき	薬袋 舞子 (「リラックス・パフォーマンス」担当)
	教育普及担当係長 福井 千鶴 (ミュージック・ワークショップ総括)	
	社会共生担当係長 月橋 朋子	

できるだけ多くの 選択肢を用意するために

——鑑賞サポート付き公演を実施して、気づいたことや大切にしたい思いをお伺いしたいと思います。

梶 鑑賞サポートは、あくまで提供するものであって押し付けであってはならないと思っています。2025年度はデフリンピックの関係で、きこえない・きこえにくい方に向けての企画を多く実施しました。だからこそ感じたことですが、そもそも、音楽が環境にない方にとって、鑑賞の機会を持ちかけるだけでも押し付けになりはしないか。そう自問自答することもありました。

薬袋 リラックス・パフォーマンスは「あらゆる人に音楽を楽しんでいただく」というのがコンセプトであり、さまざまな鑑賞サポートをご用意することを大切にしておこなってきました。

ました。一口で「あらゆる人」といっても、難しい。さまざまな当事者の方にどこまで、どんなふうに伝わっているのだろうかとお悩みのところはあります。だからこそ、当事者のみなさんのご意見を聞き、ブラッシュアップしていくことを心がけています。

きこえない当事者の方に伺って印象に残っているのが、「自分はきこえないけれども、オーケストラの動きを見て、指揮者が激しく身体を動かしていることが新鮮で、驚きだった」という言葉です。オーケストラの配置も面白かったという意見があって、私たちににとっては当たり前の風景ですが、そういう楽しみ方があるのだとはとしました。

中村 「(芸術を楽しむ) 選択肢は多いほうがいい」ということは、さまざまな当事者の方がおっしゃっています。少しでもその選択肢を用意しよう、できることから始めようと、通常のコンサート(「響の森」)でも、点字と白黒反転・拡大文字の曲目リストを用意する

取り組みを始めました。たとえ利用する人が少なくても、ホール・劇場が粘り強く続けることが必要だと思っています。

梶 やはり、できるだけたくさんのもを用意して、多様な方々が楽しく選択できるようにする。そんな環境を整えることを続けていけたらと思いますね。

大橋 公演に来場される方々と接して、障害の個性、個性は多様であるということを実感しています。だれもが音楽を楽しめるようになってほしいと心から思うのですが、一方で、この個性に公立文化施設はどのように対応していけるのかと考え続けています。

ワークショップでの 経験から得た気づき

——鑑賞サポートの枠を超えた、きこえない・きこえにくい子どもたちに体験してもらおうワークショップ「不思議なミュージアム」の制作で、さまざまな学びがあったと聞きました。

福井 ろう者子どもたちに向けた最初の取り組みは、ろう学校へのアウトリーチです。ろう学校の先生による手話通訳で実施していました。次のステップとして、既存の聴者向けのワークショップで、要所要所を簡単な手話で表現する方法で実施しました。出演者でもあるワークショップ・リーダーが、自ら学んだ手話を使って直接参加者とコミュニケーションを取る点は手ごたえを感じましたが、ろう者の方から、「わからない部分がある」といったフィードバックがあるなど、課題感にはめぐえない状況でした。ろう者と聴者のお子様と一緒に参加された時に、ろう者のお子様も、聴者のお子様の行動を見て、あ、そういうことなんだと後から状況がわかる。そういったタイムラグがどうしてもあって。同じタイミングで情報を伝えられていないことが

問題だと感じました。そのうち、出演したワークショップ・リーダーの1人から、「聴者向けにつくったワークショップに手話を付けるのには無理がある。最初から、きこえない・きこえにくい子どもを意識したワークショップを一からつくってみたい」という提案がありました。そこから生まれたのが「不思議なミュージアム」で、それまでも活用した「手話」や「振動」だけでなく、音をビジュアルで表現するなどの新たな取り組みが取り入れられました。

榮 ワークショップをつくるにあたり、どの楽器でどのような内容のワークができるのか、という議論を、当事者の方とともに楽器を触りながら重ねていきました。その中で、「トーンチャイム」という楽器の「音が減衰していく性質が面白い」という発見があり、トーンチャイムの音をビジュアル化していくこととなりました。当事者の方の背景にある文化を知っていくにつれて、ワークショップ・リーダーたちの音楽の見方も変わってきたと思います。耳できくだけでなく、目から情報を得たり、触ることで楽しめたりというような、多角的な視点で音楽を捉え直したのです。いろいろな立場の方の視点が入ることで、音楽の楽しみ方が、あらゆる人に向けて、より広がりをもっていくのだと実感しました。

——きこえない・きこえにくい子どもたちと一緒にワークショップを重ねながらオリジナルの舞台作品を創作する「舞響詩『田園』」では、「ろう通訳」が入ったと伺いましたが、どのような経緯があったのでしょうか。

榮 手話が第一言語で、言語発達段階にあるろう・難聴の子どもたちにとって、聴者の手話通訳による情報伝達のみでは内容がつかみづらい場合があると気づかされました。そこで、途中から、ワークショップ・リーダー(聴者)の発言をいったん手話通訳(聴者)が手

話にして、その内容をさらにろう通訳(ろう者)が、子どもたちにわかりやすい自然な手話へと訳す流れで進めました。やはり、ろう者にはろう者ならではのリズム感や語順、表現があるからこそ、ろう通訳が入ることで子どもたちの理解がより深まることを実感しました。予算や参加者の状況、目的など、さまざまなケースがあると思うので、それに応じて対応できる柔軟性を持ちたいと思います。

すべてのスタッフにとって「普通のこと」に

——鑑賞サポートや、館のアクセシビリティ向上に取り組んだことで、館や職員の皆さんに変化はありましたでしょうか。

福井 定期的にろうや難聴の子どもたちが館に来るようになると、受付等で子どもたちと接する職員も手話を学ぼうということになり、自発的に勉強する人たちが出てきました。意識が変わったといいますか、今まで遠い存在だった世界が、自分事として降りてきたという感覚があったかと思います。

榮 「田園」では、衣裳デザイナーや照明デザイナー等、舞台のスタッフの方とも、どのような衣裳・照明がきこえない・きこえにくいお客様にとって楽しいか、また、出演者が安心して舞台上でパフォーマンスできるかなど、当事者の方を交えながらいろいろな工夫を考えました。裏方の人たちも巻き込んでともに考えることで経験も増え、こうした取り組みへの認知が広がっていくことも大切だと思いましたね。

梶 「鑑賞サポートがあるのが普通だね」と職員の中で共通認識を持てるようになったこと。これが館にとっての大きな変化なのかもしれないですね。

鑑賞サポートのこれから

——鑑賞サポートやアクセシビリティ向上の先に見えるものはどんなことでしょうか。

阪本 聴覚中心の“音楽”の現場に長い間身を置いてきた中で、今回担当した「田園」では、これまでは出会うことの少なかった、きこえない・きこえにくいみなさんに、どんなふうに向き合うとよいのかとっていたのですが、関係者全員の、それぞれの考えを全部すくい上げようとするとなしきも出てくる。無理なく、互いに良いところを見つけていくことが大切なのかなと思いました。あらゆる人が普通にキャストイングされて一緒に舞台をつくっていける。それをサポートしていくのが私たちの役目だと思うので、そのための知識やスキルを今後も蓄えていければよいと思っています。

薬袋 「リラックス・パフォーマンス」のアンケートで、たくさんの感想をいただきますみなさんがさまざまな思いを抱えて劇場に来てくださっているんだと感じます。さまざまな当事者の方や病気を抱えている方にとって、会場のアクセシビリティの観点から、ホール・劇場に来るのはやはりハードルが高い側面もあると知りました。ホール・劇場が今までどれほどすべての人には開かれていなかったのかと痛感します。当事者の方はもちろん、その介助者やご家族を含んだあらゆる人々にご来場いただきたい。みんなを包み込むことができる場所になればと思っています。

月橋 鑑賞サポートを検討されている施設や団体の方からご相談いただく機会も増えており、取り組みの広がりを感じています。今後も継続して取り組み、鑑賞サポートやアクセシビリティをさらに充実させて、だれもが芸術文化を享受する環境を整えていきたいです。

クリエイティブ・ウェルビーイング・トーキョー パートナープログラム「鑑賞体験を拡張させる鑑賞サポートのデザイン」

主催 東京都
公益財団法人東京都歴史文化財団(アーツカウンシル東京、東京文化会館)

鑑賞サポートについて ～東京文化会館「リラックス・パフォーマンス」の例を中心に～

企画 東京文化会館(担当:梶 奈生子、中村よしき、月橋 朋子)
アーツカウンシル東京(担当:森 司、坂本有理、秋山 舜稀)
執筆・編集 文化科学研究所
デザイン 古屋真樹、田中雪子(志岐デザイン事務所)
写真 飯田耕治、栗原論、藤本史昭、堀田力丸
発行 2026年3月25日
公益財団法人東京都歴史文化財団 アーツカウンシル東京
〒102-0073
東京都千代田区九段北4-1-28 九段ファーストプレイス5階
03-6256-8435
<https://www.artscouncil-tokyo.jp>
©アーツカウンシル東京

*営利・非営利問わず、本書のコンテンツを許可なく複製・転用・販売などの二次利用することを禁じます。

